



A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第27回＞

再任用を通じて感じたこと、 考えたこと

～「人生の黄金期」をいかに生きるか、
新たなステージに向かって～

思いがけないプレゼント

「再任用を希望されますか？」との人事課からの打診があったのが、定年退職を迎える前年の暮れ。課長以上の管理職に適用されてきた『早期退職勧奨制度』が廃止され、六〇歳まで勤務できるようになったばかりのこの時期に、新たに設けられた『再任用制度』。私は、この思いがけないプレゼントを有り難くお受けすることとしました。この再任用制度には、フルタイム勤務（四〇時間）と短時間勤務（週

三〇時間）の二種類の勤務形態があり、原則として現職より一級下位の職位にランク付けされます。私は、次のような理由から、短時間勤務を選択することとしました。

①定年退職という区切りを明確にしたいこと。②後進が仕事をしやすいような環境づくりにつながること。③スタッフとして、これまでのキャリアを生かし、人材育成などに貢献したいこと。④「毎日が日曜日」の日にソフト・ランディングできる「考える軸」を得ること。⑤収入は、共済年金の給料



小田原 清則

北九州市教育委員会
生涯学習総合センター所長

【おだはら きよのり】岡山大学法学部卒業。昭和49年1月北九州市役所入職。給与、消防・人事、職員研修、企画、観光、港湾、区役所、保健福祉の各分野を経験。平成20年4月現職。趣味は、読書、山歩き、園芸。

比例部分を合わせるとほぼフルタイム勤務の水準を保てること。

生活スタイルが変わった！

私の勤務日は月曜日から木曜日までの週四日、勤務時間は九時から一時二〇分までの七時間二〇分。休暇等は、勤務時間に応じて比例付与されます（但し、年次休暇はフルタイム



八幡の河内貯水池にて

勤務と同じ）。金曜日が週休となり、出勤時刻も三〇分遅くなりました。「退職したんだなあ」という一抹の寂寥感とこれからの新たな可能性への期待感が入り交じるなか、昨年四月に現在の職場で勤務することとなりました。

週休三日は、新たな生活習慣を確立する上で貴重です。私は、市民農園での野菜作りや庭の手入れ、里山活動などのボランティア活動、地元の区役所主催の市民リーダー養成実践セミナーへの参加といった家族や地域への「恩返し」に、また、読書などの「無所属の時間」に当てています。「この週休をどのように有効に使うか？」を考えるようになると、平日の時間の大切さにも関心が及びます。城山三郎の言葉に、「この日、この空、この私」があります。限られた時間を、生かされていることに感謝しつつ、大切に生きる意識が高まってきます。こうして、生活スタイルの変容がなされつつあります。

仕事に対する意識と姿勢が変わった！

当初望んでいたスタッフ職ではなくライン職を拝命しましたが、職場自体は生涯学習振興・行政のスタッフ部門です。これまでの経験や知識、ネットワ

ーク等を生かすことができ、ライフワークの方向性を見出し得る場として、私にとってはこの上ない職場です。

仕事に対しては、ある程度距離を置いて客観的に把握し、優先順位を見定めて取り組むこととしています。スタッフに対する指導・助言も、意識的にコーチング手法を活用して、潜在的な能力を自ら引き出せるように心掛けるようになりました。「指導」から「支援へ」、「前線」から「後方」へを自らに言い聞かせながら、スタッフ全員と協働して「学びを通した明るい職場づくり」に取り組んでいます。もちろん、「市民のために働く」原点は揺るぎなく…。

また、私は、ふるさと・北九州市の栄枯盛衰を半生を通じて体験してきました。市役所の職員として、卓抜した職見と指導力を持った市長を始め先





響灘埋立地における緑化ボランティア活動（孫娘とともに）

達の「都市再生」への真摯で熱いチャレンジする後ろ姿から多くのことを学びました。いま、このまちは、「環境モデル都市」として内外に広く知られるようになり、ラスト・ランナーからフロント・ランナーに変身しつつあります。退職して、改めて「ドラマのあるまちづくり」に関われたことの幸運に感謝しています。私の体験を通じて得た「人とまちの可能性」について、

後に続く人々に伝えていくことも私に課せられた仕事のひとつだと考えています。まちづくりや生涯学習に関する講話や研修への講師等の要請があれば、積極的に応じるようにしています。

退職前に考えたこと・実践したこと

ところで、三年前のことです。退職という言葉が、現実味を帯びてきました。「退職後の人生をどのように送るか?」、「組織を離れた自分にとって、何が強みとして残るか?」などの不安が生じてきました。そのような時、市が企業や高等教育機関等の協力を得て『生涯現役夢追塾』というプロジェクトを創設しました。〇七年度から退職を迎える団塊の世代を中心に、退職後に、これまで培った技術、技能など様々な経験を、まちづくりや産業に生かせるようにするための人材育成講座を開設するというものです。〆起業独立〆、NPO〆、〆指導者育成〆、〆地域企業支援投資〆のコースが用意されており、約一年間にわたって各界の専門家が指導に当たるこの講座への誘いがあり、応募しました。すでに退職された方々を含め六一名の塾生と共に参加した私は、〆指導者育成〆コースを選択し、コーチング理論を中心に実践

的に学びました。かつて職員研修所に勤務し、JSTのOJT・接遇・公務員倫理などの指導者養成研修を受講していたこともあり、スキルアップにつながったと思います。塾生や講師をはじめとするスタッフの方々との交流を通して、生き方や考え方を学びました。あと二〇年あるかないかの人生を、社会貢献や自分の夢にかけようとする仲間の態度や語らひは、私に勇気と希望を与えてくれました。自分自身の棚卸しや自分の夢探し、退職後の生き方への思索などにより、不安や動揺はいつの間にか解消されていました。このような状態の中で、再任用の日を迎えることができたのです。

この塾は、その後も継続し、現在





「秋季島郷四国霊場巡拝団」に加わり、現地調査（巡拝団の方々とともに）

四期生を迎えています。卒業生による同窓会もつづられています。

私は、この経験を通して、「なるべく早いうちに、退職後のライフプランを考えることができる場の大切さ」を痛感しました。超高齢社会を目前に控えた今日、行政・企業を問わずこのような機会を設けることは喫緊の課題だと思います。

人生の黄金期の劈頭に立つて

「六〇歳から八〇歳にかけては人生の黄金時代だ。過去に蒔いた種の実りを収穫する時期だ」（佐藤富雄著『いい言葉は人生を変える』ベスト新書）という言葉を目にした時、サミュエル・ウルマンの『青春』という詩を思い出しました。青春とは人生のある期間を言うのではなく、生命の様相を言うのだ。から始まるこの詩は、職員研修所時代に新規採用職員研修での講義で取り上げたことがあったのです。当時の職員たちは、今では大きく成長し、中堅として、市政を担っています。今は、この詩を自分自身に向かって謳いあげるときなのでしょう。

「再任用を通じて感じたこと、考えたこと」について、私の経験を述べさせていただきます。この稿を締めくくるに当たり、再任用によって時間的な余裕ができたことから、以前にはやりたくてもやれなかったことに取り組みめるようになった事例をご紹介します。と思います。

私は、北九州市の若松区（旧若松市）に生まれ育ちました。芥川賞作家の火野葦平を輩出したまち、かつて石炭積出港として栄えたまちです。私は、この故郷の歴史を自分の目と足で確かめたいと思い続けてきました。昨

年から若松区役所が主催する市民リーダー養成実践セミナー「若松みらいネット」に参加し、その機会を得ることができました。この地には、四〇〇年以上にわたって受け継がれているウツシ遍路・島郷四国霊場が存在しており、この霊場を広く区民に知っていただくと共に、「癒しの散歩道」として、親しんでいただくプロジェクトが立ち上がったのです。秋季巡拝団による五日間の巡拝にも参加させていただき、フィールド・ワークを重ね、霊場マップを完成させました。古道を辿り、各札所にまつわる歴史や伝説などを学びました。今年は、地元の人々の協力を得て、ある市民センターを基点としたコースを設定し、実際にウォーキング大会を開催する予定で準備に取り掛かっています。この実践は、私の所属する生涯学習総合センターの主要な仕事の一つである「地域リーダー養成」事業のあり方を考える上でも、多くの教訓をもたらしてくれるものと期待しています。

このたびは、貴重な誌面をご提供いただき、心から感謝申し上げます。この拙稿をお読みいただいた皆様に、退職後の生き方を考える一つのヒントにいただければ幸いです。

皆様のご多幸と益々のご活躍を、心からお祈り申し上げます。